

桃太郎 發端 話 說

山東京傳作



それ赤本は、一つ趣向を種として、萬の笑ひとぞなれりける。竹に鳴く雀は、糊の爲に舌を切られ、穴に住む蟹は柿の爲に甲を破らる。惡老婆のふさくしきは力をも入れずして重き葛籠を動かし、桃太郎のてんこちもなきは、目に見えぬ鬼神もあはれと思はせ、鼠の娶入は男女の中をも和らげ、御子様方の御心を慰むるは赤本なり。これや久方の雨にしては乙姫に始りて猿の生肝をぬらし、あらかねの土にしては狸の船に起りて兎の手柄を見せ、彼善に勧め惡を懲す。かくてぞ紅粉皿闕皿の碎けたるを集め、鉢被姫の故きを濫ねて世に新しく櫻木にのぼせ、花咲爺の灰をあふぎ、慳貪爺を惡まざらめや。

浦島太郎月

山東京傳

それ赤き二粒を種としてまの哭いとまねまゐる作小
 雀の湖のなみちを切し穴をほつて掃のうみ甲を破る悪者
 のやうなまがきもいきて重き高麗をこたへ桃をた
 ててうちまねた月ふくぬ鬼神もあらんと思ひ赤炭の板入
 男中の中きわげやう振方のみかを解ひる赤木ありやね
 ひささし雨ふして入て娘おはまゐて後を生行かぬしあ
 かねはかふして狸のやうなうて免み子抱をみせ彼を
 まるきと面かろうけうてを紅弦血鉄四乃碎けるまじり
 鉢被娘の右ふみづねてせし新く振木ふのなせ花咲
 ちの灰をあふきちんやんちを面まゐるや

津島大郎丸

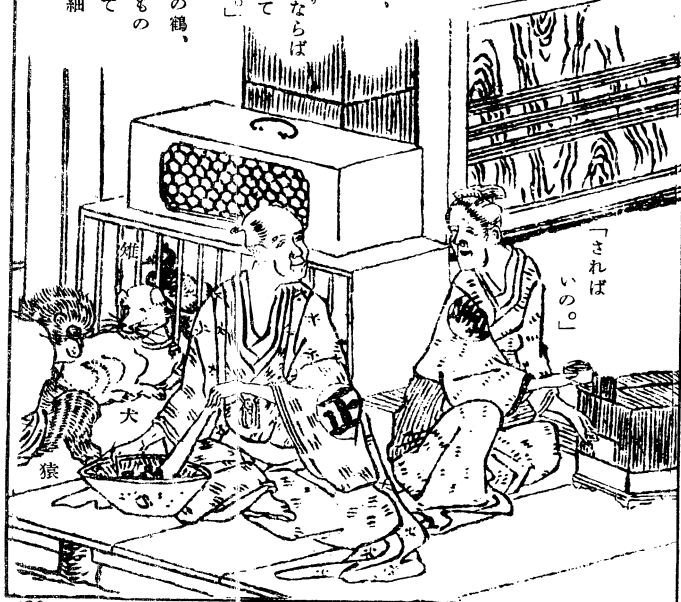
山東 京傳



話説す、昔々の事かとよ、陸奥の片ほとりに爺と婆とあつたとさ。夫婦共にすんど正直な者で、かりにも悪しき心を持たず。憐み深き者なりけるが、飼鳥を商ひて世渡りとす。されど生あるものを養ふも大きな罪にして商賣の道ならざる事を歎き、常に物事に情をかけて暮しける。

「譬のふしに猿と犬は仲の悪きものなれども、正直夫婦の篤實故に、飼はるゝもので和順して、狎と猿は別して仲好く、「お婆や、放鳥ならば損をしても賣つてやるがよいぞや。」

「何とお婆、焼野の雉子、夜の鶴、畑の里芋、鱈の胎子を思はぬものはない。こちらは此年になつて子の無いといふは、てんと心細いことではおじやらぬか。」



その隣に、人の洗濯などして
 身のたつきとする嬌暮しの
 慳貪婆あり。隣の正直あくぬき
 にも似ず、色黒く骨太く、あくは
 澤山にて、慾で占め込むひば川の
 鰻鮓愚鈍な生れにて、常に山葵卸し
 の目に角たて、嫌味辛味が得手もの、
 卸大根ふと印、唐辛子のふさ／＼しき
 お婆にてぞありける。

「今日は、てんこちもない
 好い天気ぢや。兎角
 てんやわやのあくでなくては、
 貧乏世帯の垢は落ちぬ。
 實事師では間尺に合はぬてや。」



爰に又、其頃中將實方といへる人、勅勘を蒙り、陸奥の方へ彷徨ひ來り給ひしが、さなきだに旅は憂きものなるに、踏みも習はぬ山坂に苦しみ、飢に臨み給ひし故、慳食婆が家に立寄り、食物を求め給ひしが、もとより情無き者なれば、食を奉らず、痛はしくも追立て申すぞ不敵なる。「から腹がへりま大根と

來ては、ふと印といはれても、後へも先へも

行くことは、ならずの森の「こつちの鶴鶴。」と一人つぶ

ずきおはします。

上げ下げさへてんやわやと來て居るものを、けちいまいますしい。て

正直の夫婦は此態を見て御痛はしく思ひ、實方を我家に伴ひ、

んと内裏舞の棚晒しと來たわ。」



「こは情なの
鄙人や。」

いろ／＼いたはり申すぞ優しき。

「何ぞ上げましたうはござりますれど、
東の果の山家と来て居りますれば、
ひきの屋の銅鑪、薩摩諸、四方の
瀧水といふ場所も梨の切口といふ
穿鑿さ。」

「これは背月になつた桃でござります。

これでもおせしめなされて、飢を
お凌ぎなされませ。

てんとお痛はしや／＼。」

「うまいもゝや可愛のもゝやとは

故人白猿がお定りかへ。」

「これは、てんとうまさうな

桃ぢや。しかし、大の痛事、

近年の大當りと來たわ。」

深林人ふ



しても實方卿は正直夫婦が情の桃にて
 凌ぎ給ひ、また行先に赴き この時、實方の朝臣
 給ひしが、此程の疲れにや 幼き時、親の恩深かりしを
 御心持例ならず、道の傍に 思ひ出でて、かくなん
 病臥し給ひ、懐しき都 詠み給ひける。
 は雲とのみ眺めやり、
 つれなき命を啣ち、
 かく陸奥の土となるとも
 此歌道化百人首に見えたり
 花の都の慕はしく、涙に咽び給ひしが、
 折節傍の一叢茂れる竹藪に雀集り
 巢につきて卵を暖め居るを見給ひ、
 われ此の所にて空しくなるとも、
 一念雀となりて都へ上り、
 臺盤所の飯を食はんと
 心に観念し、彼の雀の卵と實方卿
 の一念と合體して一羽の雀と化す。



これ實方雀と申す謂なり。

「お雀御様もお血心も無うて
おめたい詮議でござる。」
「おふくら様、まあ〜奥の
竹縁で酒でも上りませ、
鯛の味噌吸を申しつけました。」



實方の一念雀の子となり、都の方へと
 志しけるが、まだ巢離れの事故、はか
 ばかしくも飛びやらす、里の子供に
 とられて難儀に逢ひける折柄、正直爺
 此の所へ來かゝり、實方の一念とも
 知らず、雀の難儀を見かね、子供等に
 價の錢をやり雀を乞取りて我家へ
 歸りける。

「子供等をよくくるめて
 雀を助けてやりませう。」

「これ／＼子供、
 この錢をやる程に
 その雀をおれに呉れ、
 よい子ぢや。」



「ぶつちめる／＼。」

「此雀はおいらが
 捕まへた、誰にも
 やる事はならぬ
 ぐ。」

正直爺、かの雀を連れ歸りけるが、
一體鳥屋の事故、早速籠に入れ、餌を與へて
勞りけり。もとより實方の一念たる雀なれば、
重ねくの情を感じ、正直夫婦を慕ひければ、
後々は籠を出して放飼になし、
夫婦ことなう可愛がりけり。

「勸學院の雀は蒙求を囁くと

申しますが、私はお前方に

かんがくされる雀でござれば、

モウくさうの音も出ませぬ

てや。」

「雀の難儀をお救ひ下された

からは、ちうくの御恩

でござります。」



「そんなに歩いて猫や鰻に
とられまいぞ、合點か。」

さても雀は正直夫婦が愛しきを受け、籠中の苦しき
 もなく、放飼になりて暮しけるが、或日長閑
 なるまゝ、日當りに出でゝ遊びけるに、
 隣の慥貧婆が洗濯糊とも知らず、
 鹽にありし姫糊をしたゝか嘗めけ
 るが、慥貧婆見つけて、てんこち
 もなく腹を立ちて、雀の舌を
 ちよつきりと見知らせて

こませけり。

「糊をみんな瀬々漆と出た。ふさ
 しい雀ではある。牛の角の切口、
 ふといの柑付と来たわ。」
 「てんと、しようづかの婆ア六道の辻の
 舞臺顔と来たわ、この仕打は故人天幸
 もどき、雀に愛目を見せるからは、
 竹の子婆アではないか、今に思ひ
 知らせて呉れん。」



口は禍の門、舌は禍の元、雀は
 慳食婆が姫糊をせしめて舌を
 切られ、今更面目なく、飛ばんと
 すれど糊をしたゝか嘗めける故、
 羽もからだも板天神と来て、元の
 古巢へも歸り難く、死ぬるより外
 なしと濱邊をさして迷ひ來り、
 兒ヶ淵の白菊か古池の蛙かといふ仕打にて
 どんぶらこと飛込みしが、體の糊は溶けしが
 寒の中なりければ、一身凍りて蛤となるぞ
 牽強らしき事どもなり。まことや淺蜩蛤の
 糊賣をするといふ言葉も據りどころ
 あることぞかし。

「いつそ
 此身を
 すぐめに
 かけて
 さうぢや。」
 蜀黍に百合
 の根かやと
 山獨活も、
 零餘子の薯で
 はだな油揚げ。

「實方の一念化したる雀ほどあつて
 兒ヶ淵の歌を詠む、青物盡し



燒野の雉子夜の鶴、子を思ふ道は、
一筋にて、舌切雀の親鳥は、子雀
の見えぬ故、羽の便りも聞かま
ほしく仲間の雀を頼み、尋ねに
出づるぞ優しけれ。

「雀は迷子を尋ねるに鉦太鼓では
出でず、竹を叩いて出づる故
てんと雀踊と節季候の廂間如き
出立なり。」

「節季候は雀の笑ふ出立哉と
翁の句も眼前體なり。」

此處は、所も西の海ちくらが沖と
いふなれば、暮れ行く年の豆囃子に
厄拂共、かいつかみし惡魔外道を一纏めに
なして、古き葛籠に押込め沖中へ流せしを



「親雀

迷兒の
あゝ少しおなかど
こつき山の寒鳥だ。」

「さつさとござれや
遅いぞ。」

此濱に吹きつけしが、對王丸の水入か、
出かはりの破船かと、雀共引上げ持ち歸り
けるとかや。何の所詮も無き事なれど、
これが狂言の筋ぢやてや。

「さては此淺蜩にも忤めは法螺の貝のう。
此月日貝なでし子貝で育てたもの、櫻貝の
花を散らし、此やうな蜩を海松食とは
帆立貝もない事ぢや、わしは片時も忘れ貝
ぞや、遠い親類より近き田螺ぢや、榮螺は
あるまいが、蟻蛤ながら貴様達も馬蛤の
ないやうに尋ねて下されや、たとへ串貝
ぢやといはれても、赤貝々々大事ない。
然し蛤になつたと聞けば、潮吹の頭に
牡蠣宿ると御方便で一度は鮑で下されう貝。

「松浦佐用媛は石になつたが、
わしが息子は蛤になつたといの。」



葛籠は若衆
たのみます
これでは
つぐら雀
ぢや。」

親雀は、子雀の蛤となりしを見つけ出して
 連れ歸り、鍼や按摩でやうくと、暖め
 灸もとどかねば、雀醫者指圖して、兎
 角強く暖めるにしくなしと、松毬を
 集め、焼蛤となしければ、蛤ちうく
 と鳴きしがばつくりと口あきて、
 屋氣樓の尻子玉ともいひさうな氣
 を吹き、内より舌切雀飛び出づ
 れば親雀、嬉し涙の雀泣こそ道理なり。
 「やれく嬉しや、貝の柱で
 額でも打ちはせぬか。」

醫者雀曰く

「藥瞑眩せずんば

其病癒えずといへり。

秦の泰伯獵に出てて咸陽に至る
 流火有り、下り化して白雀と爲る。



これも火のせいによつて
元の雀と化す。はて能う
似た此場の有様ぢやなア。」

「仲間の雀も氣の毒に思ひ、千垢離
を取りて雀の宮に祈りし故、雀の千垢離
實の一聲といふことは此時よりぞ始りける。

「さて／＼大きに苦勞した事ぢや、
もうこれからはちつとも桑名の
焼蛤ぢや。」



「舌切雀お宿は何處ぢや、ちよつ〜ちよ、

「白木に鯛、

「結納は婿ぢや。」

「下着はすみれ、

お江戸は派手ぢや。」

始終無きものは確ならずとかなや。

正直夫婦は雀の行衛を尋ねに

出でけるが、思ふ心の誠届きて

雀の隠れ里に尋ね當りければ、

雀共正直夫婦が大恩を報いんと、

心の丈を盡して馳走し、歸りに

舌切雀

「お二人様の

御恩は

忘れませぬ。」

雀共、御馳走に
お家の踊りを始める。

「おいらでせ。」

「合點ぢや。」

「ちとお代へなされ

まし。お汁は雀瓜

お焼物は雀焼で

ござります。」

一つの葛籠^{つづみ}を土産^{みやげ}に與ふる。
正直夫婦は慾^{よこしま}のなき者故、
輕き葛籠^{つづみ}を貰ふ。此の所は
子供衆がよう
御存じなり。

「雀は都とはよくいうた
ものぢや、山の中にも
此やうな座敷がある。」
「これは
いかい
御馳走ぢや。」



正直夫婦、彼の輕き葛籠を「饗食婆この態を見て美しがる
貰ひ歸り、内を開きて「あいつらはうまい事を
見れば、多くの寶物を詰めしをつた。何でも
置きたり。雀の寶とて
竹の子の隠笠、笹の葉の
隠蓑、竹屋町の切で張りたる打出の小槌、
その他笹鶴切の巻物、世に稀なる品々を入れ置きたり。
これ子供衆のお目覺しに昔噺の戲言ながら、
陰徳あれば陽報あるのたとへとは
知られたり。



「斷りいうて
返さしやれ
ぬか。」

「こづちに如才はないものを、
このやうな痛事をしてくれば、
てんと迷惑ぢや。」
「このやうな寶を持つとは、
てんとふくら雀ではなうて
きつい福者雀と來た。」



隣の慳貪婆慾深き心より美しく思ひ、同じやうに
雀の隠れ里へ尋ね來り、葛籠を貰はんといふ。

「今度は雀も餘り馳走をせず、
仲間の鶯餅で間に合はせる。」

「鶯のちゝつくわいでは無うて、
葛籠のごしゅつくわいに見えた

のぢやな。」

ば、

「放下師の小刀ではないが
呑込山なら、早う葛籠を

貰うて歸りましょ。」

「てんと、ふさ／＼しい

お婆ぢや。」

「わしは達者だから、

随分重い葛籠がよいてや。」



「舌切雀

「お茶
上りませ。」

君子は人の福を喜んで羨むの心なし。かるが故に己達せんと欲して先づ人を達す。小人は人の福を憎んで貪らんとす。この故に善を遠ざけて賢を憎む。慳貪婆が慾の張葛籠は、罪の重き事葛籠より甚し。心の慾の連尺に繋がれて罪を葛籠と共に負ひぬ。子供衆此處らがよい目のつけ所ぢやが

合點か。

「てんと重い葛籠だ、何でも此内の寶をせしめ漆と出て銅鑼焼甘藷の食飽をしませう。」



舌切雀は一昨日來やれとお婆を蜘蛛の取扱ひにてあとへ鹽を撒く。

「何と、己が仕打は袖鑑の庵室の段、軍助もどきと見えようがや。」

慳食婆は重き葛籠を持ち歸りしが、一體此葛籠はちくらが沖にて拾ひたる惡魔外道を籠め置きし葛籠なれば、蓋をあけるまでもなく、忽ち中よりめり／＼と葛籠をこはし、異形の鬼神現はれ慳食婆を宙に擲んで鬼ヶ島へ飛び行きしは、てんこちもなき次第なり。

宇治拾遺に

今は昔女あり。雀の怪我したるを養ひて放ちければ恩を報ふため瓢の種を唾へ來る。その種を植ゑたるに、瓢多く出で來て皆内に白米あり。隣の女これを美み、無理に雀に怪我させて養ひ放ちけるにぞ、此雀も瓢の種を唾へ來る。植ゑければ果して出で來にけり。さて瓢の内より毒虫多く出で、彼の女をいたく刺しける。此葛籠も彼の瓢より出でたる話なり。物美みはせまじきものなり。

「もゝんぐわアなんどいふやうな
なま 忘けた事ではない。ア、つのもねえ。」

「何と凄じ
すま からうがや。」



「かうつるしあけられては、
そつちの
おにみより
こつちの額
がいた印
いたいのねと
來たわ。」

「ア、
助け給へ。」

「猿は又猿和口を出しやるな。庚申様を

大事にして、見ざる聞かざる言はさる

を忘れず、眞如の月に手を締め、心の

手綱を括猿にしたがよい。」

「徳孤ならず必ず隣の婆に引かへ、正直夫婦は數の寶を授り、誠に生前の望足りて

「雉は三十六歌仙の家持の

歌を思ひ、雉も

鳴かずば撃たれ

まじと

いふ諺を忘れ

まいぞや。」

鳥屋商賣をやめ、いろは附けの倉を建て、何暗からず暮しけるが、一體律氣一遍なる者故、昔の貧しきを

「犬はこつちに居る者なれば、

ゆるくと

教へませう」

慈悲善根を心がけて

暮しける。さてこれまで

飼置きたる生類残らず放ちけるが

中にも、猿と雉とは、

これまでの恩を感じ、

別れを惜しむ。



犬は歸るべき家もなければ、矢張り仕へたき由願ふ。

畜類ながら殊勝なることどもなり。されば慳貪婆が如く

惡を好めば忽ち禍を招き

正直爺が如く善を修すれば

幸ひを蒙る。天道様は

見通しぞや。何と子供衆

合點か。

「お暇乞の御祝儀に節氣候で

ちと白をこじつけませう。」

「きじれい變らず、わんわのお庭へ

舞ひ込め飛び込め、きやつきやと

小猿や犬ころ。」



雄がいふ

「地震の時

は早速

お知らせ

せ申しませう。」

の御恩は

忘れませう。」

「段々の御教訓

有難う存じます。

土も木も我が大君の國なれば、
 何處か鬼の宿と定めんと、
 紀伴雄が詠ぜしも理ぞかし。
 頭に角を戴き、虎の皮の褌は
 しめねども、道にそむける者は
 惡魔とも鬼ともなるべし。
 鬼界ヶ島に鬼は無く、鬼は
 都に在るぞかしと、女護の島の
 文句も宜なり。
 さて慳食婆は、無理の慾を
 かはきしより、おのが心の鬼に掴まれて
 遂に鬼界ヶ島の仲間入し、鬼の留守
 には洗濯しておのれが
 心の垢を落すべき氣もつかず、
 ますます慾心増長して、
 鬼角正直夫婦が



「あの正直奴は一廉の寶をせしめて、
 今はまぶな金持になりました。
 わしにはお前方を詰め込んだ
 葛籠をあてがうて天井を

見せました。

いやはや

腹の立つた

穿鑿さ。」

「鬼一口に吞込のよい
 衆ぢや。」

寶を得たる事を心憎く
思ひ、鬼の大王へ勸めて
正直爺が寶物を盗ませんと
工む、不敵なりける

穿鑿なり。

「そんなら何でも岩戸神樂の
くろどんと出かけずば
ならすの森の犬天狗
ときんにとつての吉瑞だ。」

「何にも黒鬼する事はねえ、放下師の
小刀細工ではねえ、鋸 鉋 斧 鉞
のみ込山の墨壺だ。」

まづ前祝に四方の瀧水

をもめよう。

「そいつは、ぶつちめ印と
せずばなるまい。」



慳貪婆は或闇の夜に
 鬼共を伴ひ、勝手
 覺えし我里なれば
 案内して忍び入り、
 隠笠、隠簀、打出の小槌に
 錦の巻物及び金銀
 米錢を奪ひ、
 鬼ヶ島へ立歸る、
 不敵なりける
 鬼どもなり。

「何でも六段目の切には
 思ひ知らせてこまさうと
 思うたに、てんとよい氣味
 思ひ知つたか、わん」



怪食婆は慾深き事ゆゑ、

まだ何ぞ寶あらんと

あとにひき残りけるが

正直が手飼の犬に

食ひ殺さるゝぞ心地よき。

「怪食婆、常に惡を好みし故、

煩惱の犬に食ひ殺さるゝ。

謹むべし恐るべし。

「後なる鬼に物間へば

鬼らは知らぬとつい通る。

「から風呂敷包を背負つた所は、

風の神の紙屑拾ひと見えようがや。」

「鬼の目にも闇だとは

このこつてあんべい。

暗いぞ〜。」



犬骨折つて寶とらるゝ
と申すは、此時よりぞ
始りけり。

「あの犬は、大きなさまで吠えるわ〜。
荒神様の吠えるわ〜と來たわ。」

正直夫婦は鬼に寶をとられ、昔の富貴引きかへて、今はもとの柴の庵に引込み、夫婦貧苦を凌ぎけるが、或日夫婦とろくろとまどろみけるに、夢ともなく現ともなく、實方朝臣現はれ給ひ、爾不幸にして禍を受く、われ等爾に桃を乞ひて飢を凌ぎたり、その恩を報ゆるため明日その桃を返すべし、その桃を喰ふ時は夫婦忽ち若やぎ、孝行にしてしかも力量人に勝れたる一子をもつべし。その子必ず爾等が爲に鬼ヶ島に至り、寶をとり返して仇を報ゆ。又夫婦が憐みたる猿、雉、犬、共に力を添へて恩を報ゆべし。再びかく貧しくなるとも、



天道如何ぞ爾等が正直を感じ給はざらんや。
陰徳あれば陽報あり、積善の家には

必ず餘慶あり

爾等が末には又

大富貴の身と

なるべし。ゆめ

ゆめ疑ふ事勿れ

と告げ給ひ、

數萬の雀と化して

飛び去り給ふ。



「とひよ〜」

とひよ正直

起きよ正直。」

正直夫婦は、寢言にまで
正直なことをいふ。

「お婆や、人に借りたものは
早く返して、貸したものは
随分おそくとりやれや。」

正直フウ〜。

正直

フウ〜

ゴウ

〜。

昔々あつたとさ。
 爺は山へ草刈に、
 婆は川へ洗濯に、
 川より流れて来る
 桃に、若やぐ夫婦
 の中に儲けし
 桃太郎は、子供衆
 御存じの鬼ヶ島、
 大猿雉が忠臣話、
 忠は雀の音に残り、
 桃の中なる實方に、みゝをとつたる花の春、
 お子様方のお睡氣覺し、
 やんら目出度の市が榮えた。

「やれ／＼大きな桃が流れて
 来申した。も一つ流れたら
 お爺におましょ。」



春朗重

京傳作